

このロケーションをご馳走に、
ご飯を何杯も食べられます!!



四賀ガルテナーの楽しみ

ガルテンで何してん!?

「どんな冬景色になるのか」
「冬タイヤを買って楽しみに」

緑ガ丘クラインガルテン 330号

小山田 信義さん・好子さん夫妻

埼玉県川越市から通う小山田信義さん(69)好子さん(59)夫妻は、今年18組がスタートした、四賀ガルテナー1年生のうちの1組です。

春からは「一度、生でかじってみたかった」というトウモロコシ、枝豆、ミニトマト、ナス、つるなしインゲンなどを栽培・収穫し「インゲンが嫌いだった娘が、まだ柔らかいころの(市販されていないような)ものをおいしいと言って食べるようになった」と喜んでいきます。

偶然が重なって導かれた四賀

「この場所は願ったりかなかったりです。本当に偶然が重なって、こうして素晴らしい景色を眺めている」と嬉しそうなお子さん。四賀への道は綱をたぐり寄せるように、一直線に引き寄せられたようです。

ご主人の定年後は「千葉が長野県で田舎暮らしがしたい」と思っていた好子さんが今年1月、新聞でふと目にとめた「クラインガルテン」という文字。これは何だろうとパソコンで調べ、まずは2月の申し込みに参加することに。抽選は5倍近くの競争率で次点となる

も、当選者が辞退して見事に獲得。後押しするよう3月から高速道路の1000円化が始まり、信義さんが6月に退職。こうしてトントン拍子に話が進み、一度もラウベの場所を見学することなく、道路からすぐ上に位置する330号の、胸のすくような景色を手に入れました。信義さんにとつては、企業人生活を捧げ、熱い思いのある「新宿中

村屋」。奇しくもクラインガルテンは、安曇野出身である中村屋の創業者、相馬愛蔵・黒光夫妻のルーツに最も近い生活となりました。

デッキにイスを並べて出して食事する夫妻。好子さんは「このロケーションをご馳走に、ご飯をおかわりできますから」と満足顔です。

「土は触らな」と宣言するも

「土嫌い」を自認していた信義さんですが、有機農法が主体のガルテン生活ではどうもいかず、スコップで畑を耕すことに…。ところが土を掘っていると、大地から鋭気をもらう感じが…。と話す目が輝きます。思いがけない自身の変化に驚きながらも「畑はまず土作りから」といい汗をかいています。「稜線に昇る朝陽とともに起きて畑を耕して、そこで採れた作物をいただく…。この生活で私たちは、えらく哲学的になったわね」と好子さんが微笑みます。

「1年を通して、半分は滞在したいですね。もつじきタマネギの苗を植えて、スタッドレスタイヤを買います。どんな冬景色になるのだからと、今から楽しみです」